東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

# バンコク日本人学校における外国語学習と異文化理解教育の取り組み



| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2022-04-07 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 乾,恵里子 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/00173684 |

# バンコク日本人学校における外国語学習と異文化理解教育の取り組み

前泰日協会学校バンコク校(バンコク日本人学校)教諭
島根県浜田市立三隅小学校教諭　乾　恵里子

キーワード：在外教育施設、バンコク、外国語学習、異文化理解教育、グローバル人材

## １．はじめに

（１）在外教育施設勤務の動機

青年海外協力隊員としてパキスタンで活動していた間、イスラマバード日本人学校で勤務する先生方に公私ともに大変お世話になった。先生方との交流を深める中で、卓越した指導技術や情熱をもって業務に取り組む姿勢に強い憧れを抱いた。そして、自分自身もそのような教員を目指し日本人社会のために貢献できればと受験を決意した。

（２）世界一のバンコク日本人学校

タイは日系企業の一大集積地であり、在留邦人数は約7万人と言われている。私が3年間勤務することになったバンコク日本人学校は、世界最初の日本人学校として1926年に設立された最も歴史ある、そして世界最大の日本人学校（2019年4月時点で2628人在籍）である。そのため、“世界に貢献できるグローバル人材の育成” を使命とし学校も力を注いでおり、周囲からの期待も大きい。

バンコク日本人学校のグローバル人材育成の鍵と考えられる多様な取り組みを紹介すると、国際バカロレア（International Baccalaureate ： IB)の趣旨を生かした教育、コミュニケーション力（英語力)、ICTの活用力の向上が挙げられるだろう。ここでは主に私が担当していた小学1年部における外国語学習（タイ語・英語）と異文化理解教育に関わる各教科の学習について述べる。

## ２．グローバル人材の育成のための取り組み

（１）外国語学習の取組について

①本校における外国語学習

本校ではタイ人教員によるタイ語の授業と英語教員(Native English Teacher：以下NET)による英語の授業を全学年で実施している。タイ語は全学年で週1回、英語（「外国語活動」「外国語」も含む）は、1・2学年では週1回、3～6年生では2回実施されている。タイでの生活を活かし両国交流の大きな懸け橋となり、さらには世界で活躍できる人材育成を目指した異文化理解コミュニケーション能力の育成を図っている。よって、その指導内容は、言語習得のみに限らず、タイをはじめとする世界の文化や歴史、生活習慣にも及ぶ。

タイ語は日本語の堪能なタイ人の教員が、本校独自のカタカナ表記の教科書を使用し会話を中心に指導している。難解なタイ文字を習得することには重きを置いておらず、分かりやすい内容になっている。また、タイにいながらタイの人との関わりの少ない本校の子どもたちには、祭りを始めとするタイの行事等にも触れ、タイについて学ぶ良い機会になっている。

一方、英語は、NET以外に日本人の教員がT2としてティームティーチングによる授業を行い、子ども達の個人差に応じたサポートをしている。全学年において、週に1回は担任が入り学習状況を把握することができる。授業は、ゲーム等のアクティビティを通して子どもたちが自然に英語を話す機会が多く設定され、コミュニケーション能力の基礎となる、話す・聞く能力の育成を楽しみながら達成できる内容になっている。実際、子どもたちは英語の授業が大好きで毎時間楽

しみにしていた。さらに、読む・書く能力の充実を目指し、H30年度より全学年でOxford社の教材を教科書として使用している。

本校における外国語学習は、タイ語も英語もネイティブの教員に習うことで、タイという異なる国を身近に感じることができ、子どもたちの異文化理解に大きく影響していると感じられた。

（２）異文化理解教育の取り組みについて（H30年度小学1年部の実践より）

①生活科の学習を通して

1年生では、生活科の教育課程において年間通してタイのヒト、モノ、コトとの関わりが設定されている。

1学期は6月にサファリワールドの校外学習を実施した。小学校に入学して初めての校外学習であったが、ワニ、イグアナ、プレーリードッグなど本物の動物を見て、子供たちもとてもうれしそうだった。中でもキリンのエサやりは印象的だったようだ。最初は、怖がってキリンに近付けない子もいたが、自分でバナナを食べさせた後は、「まつげが長くて、かわいい目をしていたよ」「舌は紫色だった！」と、興奮しながらその感想を担任に伝えた。午後はバスの中からオープンズーを見学した。アフリカのサバンナのような広大な敷地の中で貴重な動物を間近に見ることができ、子どもたちにとって思い出多き一日になったと思われる。

2学期には9月に現地校との交流学習（詳細は後述）を本校で実施し、続いて「タイのあそびをたのしもう」という学習をした。子どもたちが家で調べてきたタイの遊びを学級で紹介し、実際にその遊びをした。パオコップ（輪ゴム吹き）、リーリーカォサン（ロンドン橋）、ドゥーンガラー（ココナッツぽっくり）、クワールークポン（風船運びリレー）、ヨートルン（豆入れ）等、計10種類以上の遊びに挑戦した。タイの遊びには日本の遊びに似たものもあり、子どもたちにとっても身近に感じるものが多かった。中には植物や道具を使ったタイ独自のものもあり、子どもたちにとっても、とても新鮮なようであった。10月の授業参観では、ココナッツの葉を使って、眼鏡や魚を作った。子どもたちだけではやや難しい作業だったが、参観した保護者と一緒に楽しみながら体験できた。以下、参観後に書いた子どもたちの感想である。

昨日は、授業参観でした。お父さんとお母さんと一緒にココナッツの葉っぱで眼鏡とお魚を作りました。緊張したけど、楽しかったです。

子どもたちは、10月に同じく「タイのあそびをたのしもう」という学習で、校内で働くタイ人スタッフに計8種類の遊びを教えてもらった。バナナの葉を馬に見立て、それにまたがって遊ぶマーガンクルアイなど、タイならではの遊びに子どもたちは夢中で取り組んでいた。授業後スタッフとも親しくなり、自分から声を掛ける姿も見られた。

12月には、本年度2回目の校外学習でラマ9世公園に行った。東京ドーム約17個分の広さがあるバンコク最大の公園は、色とりどりの花で咲き乱れ、南国らしい植物や小動物等が観察でき子どもたちも大喜びだった。中でも、池で偶然に現れたミズオオトカゲの姿には大興奮だった。

校内の学級園でも、年間通してタイの異なる植物が育てられ成長を観察することができた。パックブン（空心菜）というタイ料理に欠かせない野菜を育て収穫した際には、次の日の弁当の一品として持ってくるなど、それを味わうこともできた。

学習を通して、子どもたちの現地のヒト、モノ、コトへの関心が高まると共に日本と比べることで自国への思いが強まった。そして、互いの国の良さについて理解・関心を深め、尊重しようとする心情や態度を養うことができたと感じた。

②図画工作科の学習を通して

図画工作科では、農耕祭「ピーターコーン祭り」のお面作りに取り組んだ。タイの奇祭と言われる「ピーターコーン祭り」について、子どもたちは実際に使用されるお面に触れたり、祭りの映像を見たりと興味をもった。作品が完成した際には自分のお面をかぶって踊るなど、楽しく学習に取り組んだ。

制作したピーターコーンの面をかぶって踊る児童

③現地校との交流学習を通して

9月にカセサート大学附属小学校との交流学習が本校で実施された。タイの小学校の1年生と、文化交流やスポーツ交流を通して関わることができる1年に1回の貴重な機会だ。この日のために子どもたちは1学期からタイ語バージョンの「♪しあわせならてをたたこう」の歌の練習や、ぶんぶんゴマのプレゼント作り等、一生懸命に準備に取り組んできた。交流学習会は、毎年ホスト校が交互に入れ替わる。この年は本校がホスト校として相手校を迎えたので、子どもたちも自分から声を掛けて積極的に友達に関わろうとする姿がたくさん見られた。最後まで笑顔でタイの友達を見送る様子から、交流学習会が充実したものであったことが伝わってきた。本当に子どもたちにとって良い思い出となった。以下、交流学習会後に書いた子どもたちの感想である。

私はタイ語が話せないので、タイのお友達とお話するのが難しかったです。歌を覚えるのが大変だったけど、頑張りました。

「しあわせならてをたたこう」をタイ語で歌うのを頑張りました。Aさんが紙コップけん玉を作るとき、タイ語で話していました。けん玉作りがとても楽しかったです。

案内係をする時、どきどきしました。タイの友達を連れて行くとき、うれしくて笑うのが止まらなかったです。タイの友達が来て、楽しかったです。

学習の事前・事後に実施したアンケート結果から、子どもたちの変容が見られた。「タイは好きですか?」「タイの人と仲良くなりたいですか?」の質問には、どちらも伸びが見られ、子どもたち自身がタイという国やタイの人たちを肯定的に受け止めようとしていることが伺えた。

また、子どもたちの語学学習に対する興味関心が大きく変化したことも分かった。「タイ語を話せるようになりたいと思いますか？」の質問に対しては、大きな伸びが見られた。このことより交流学習会を通して子どもたちがコミュニケーション手段としての語学の必要性を感じ、語学学習に対する意欲を喚起したと言える。また、前述の「タイの人と仲良くなりたいですか？」という質問に対する答えからも、コミュニケーションの素地となる意欲面の高まりが感じられる。学習全体を通して、子どもたちがタイの文化についてより深く知ろうとする姿勢も見られた。

カセサート附属小学校との交流学習会

④子供たちの生活の中から

タイに住んでいる本校の子どもたちではあるが、日本人コミュニティも大きく、タイの人たちやタイの文化との関わりは意外に少ないように感じていた。しかしながら、週末にタイの観光地に出かけたり、タイの友達と触れ合ったりと現地理解を図っている様子が日記や普段の様子等から垣間見えた。

## ３．終わりに

バンコク日本人学校では、NETやタイ人の教員等、ネイティブの人材が確保され、存分に活用できる外国語の指導体制が確立されている。子どもたちは英語・タイ語に触れる機会が保証され、コミュニケーション能力育成を図っていた。

異文化理解教育については、教科学習（生活科、図工科、社会科、総合的な学習）や校外学習等を通して、現地理解を図る活動が多く実施されていた。特筆すべきは、現地校との交流学習だ。交流学習会を通じて、子どもたちがコミュニケーション手段としての語学の必要性を感じ、学習意欲を喚起したと言える。

さらに、学習を通して子どもたちがタイの文化のみでなく、自国日本の文化についてより深く知ろうとする姿勢も見られた。「タイのことが好きですか？」「日本のことが好きですか？」「タイにいて良かったと思いますか？」の質問にはどれも伸びが見られ、子どもたち自身がタイや自国を肯定的に受け止めようとしていることが伺えた。

すなわち、バンコク日本人学校の子どもたちは、外国語学習と異文化理解教育の取り組みを通じ、語学学習やコミュニケーションに対する意欲を高め、自分たちが暮らすタイや自国、ひいては自分自身を肯定的に受け止めていると言える。

グローバルな人材を育成するために重要と考えられる様々な取り組みについて探り、帰国後の実践に生かしたいとこのテーマを選んだ。在外教育施設勤務を通して、自分の暮らす地域や自国を肯定的に受け止められる子どもたちを育成したいと改めて感じている。現在勤務する島根県では、「ふるさと教育」を重点施策とし全ての公立小中学校で進めている。住んでいる地域について学び愛着や誇りを醸成することで、子どもたちが自分自身を肯定的に受け止め、他地域に対しても尊重しようとする心情や態度を養うことができるようこれからも努めていきたい。